

はこ まくら
箱 枕



(左) ばち枕、(右) 箱枕／岡崎むかし館蔵

現代社会では、人の眠りに関しても科学的に研究され、自分の身体に適した枕を使用することが安眠に重要であるといわれています。そうした意味では、15～20 cmもの高さがある箱枕は、いかにも寝にくそうです。どうして、このような枕が使われていたのでしょうか。

箱枕とは木枕きまくらの一種であり、箱型に作られた枕のことをいいます。下が扇状おうぎじょうに広がった奥行き狭い台形で、その上に小枕こまくらという「くくり枕」を和紙に包み取り付けて、布団ふとんの外に置いて使われました。髷まげを結った髪形かみがたが寝る時に崩れないように考案されたもので、頭部くびすじではなく首筋に枕をあてがいます。写真の箱枕は底が船底ふなぞこのように丸くカーブしており、左右に揺れ、スムーズに寝返りができるように工夫されています。髷を結う髪形が流行した17世紀中頃(江戸時代中期)には、髪形を保持するためにこうした枕を男女ともに用いていました。しかし、1871年(明治4)に出された男子結髪廃止の布令けっぱつ ふれい だんぱつれい(断髪令)により、髷を結う男性は見られなくなり、主に日本髪を結う女性によって1930年代(昭和初め)頃まで使用されました。毎日使う身近な存在であった箱枕も、髪形の変化とともに使用されなくなりました。

道具は形態や役割も時代とともに変化するものです。枕もまた、人のくらしの在り方を反映している道具の一つです。